蛙と蟲斯

青

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

蛙と螽斯

【Ｎコード】

Ｎ２３０６Ｚ

【作者名】

青

【あらすじ】

蛙と螽斯（キリギリス）のお話。

春に出会ったあなたを好きになった。たとえ、あなたが居なくなってしまうと分かっていても。

出会い

風が吹き抜けた。夏の暑くしっとりとした風ではなく、凛と澄み切った冷たい秋の風。落ち葉や穏やかな日の温もりに温められた草の匂い。それらすべてを含んだ風が体の中を抜けた瞬間、

「ああ、もう秋なんだ」

という実感と、切なさが押し寄せてきて。不意に鼻の奥がツンッとして、慌てて水の中に飛び込んだ。じゃないと、泣いてしまいそうだったから。

冷たい水の中を進んで行く。水もすでに夏のそれではなくて。

「もう、秋なんだ」

私はもう一度同じことを呟いた。早く、彼に会いたかった。

私は蛙。好きなことは泳ぐことと歌うこと。小さな森で生まれ、兄弟達と暮らしてる。両親はいないけど、みんなで一緒に遊んだり、歌ったり寂しいことなんかなかった。毎日が本当に楽しかった。

その日も遊んでいて、少し疲れたから兄弟達の輪から抜け出して一人で池を泳いでいた。仰向けになって顔だけ出して浮いてみる。春先の温かな空気が心地好い。でも、水の中にいると分かる。夏がもうすぐ来ることを。私は夏が大好きだ。むせ返るような熱気も。肌を焦がすような太陽も。どこまでも青い空も。草木や蝉達の賑やかな声も。どれも大好きなもの。今年の夏はあれをしよう。みんなであそこに行こう。もうすでにそんな計画めで立てている。本当に夏が待ち遠しい。

しばらく水面に顔を出して春の穏やかな空を見つめていた。それから私はお気に入りの場所まで行くことにした。水の中を泳ぐ。一蹴

りごとに、体を包む水が撫でるように流れていくのが心地好い。空を飛ぶのも、こんな感じなのだろうか？

しばらくして目的の場所に到着。水草が無く、そこだけ入江のようになっているところ。私が住んでいるところのちょうど反対側。そんなに大きな池じゃないから、遠く離れているわけじゃないけど、時々一人になりたいときにやってくる場所。開けたところなので、風がよく通り昼寝にも最高の、私の秘密の場所。

水から上がり砂の上に腰を下ろす。お気に入りの緑色の水着が水を吸って少し重い。風が前髪を揺らした。しばらく目をとじて、ゆっくりと深呼吸をした。体の中が一度空っぽになって、そして全身の空気が入れ替わったような気がする。とても気持ちがいい。

私は歌を歌う。さっきまで兄弟達と歌っていた一番好きな曲。歌っているだけで心が温かくなってウキウキしてくる、楽しい曲。誰もいないこの場所に私の声だけが響く。風に乗って、どこまでも響けばいいな。そんなことを思った。

すると突然、どこからかバイオリンの音が流れはじめた。それは私が歌っている歌のメロディーだった。私は驚いて周りを見回した。しかし、誰もいない。その間もバイオリンの音色は私の歌っていた歌のメロディーを奏でている。それは、音楽をよく知らない私にも本当に上手で美しい音色だった。私はそのメロディーに合わせてまた歌いはじめた。

楽しい。澄んだバイオリンのメロディーは滞ることなく流れ、それに合わせるように歌を歌う。それが、とても気持ち良かった。私は嬉しくなって、もっと大きな声で歌った。バイオリンもそれに合わせてより軽快に快活なメロディーを奏ではじめた。誰が弾いているのかも分からないけれど、そんなことは今はどうでもよかった。今

はただ歌うことがとても楽しく、面白かった。

やがて、歌も終盤に差し掛かりバイオリンのメロディーもゆっくりとなってきた。もっと、歌いたい。もっとこのバイオリンに合わせて歌いたい。もっとこの時間が続けばいいのに。私は非常に名残惜しい気持ちに駆られながら最後のワンフレーズを歌い切り、バイオリンのメロディーも、それを知っていたかのようにゆっくりと名残を残すように止んだ。当たりを静寂が包む。こんなに静だったのかと、私は驚いた。辺りは静だがまだ少しさっきの余韻が残っているような気がした。

ふと、後ろに気配を感じて振り返った。すると、そこには見たことのない男が立っていた。身長は私より大きい。ボサボサの髪と、伸ばしたままの髭。着ている服もボロボロで辛うじて緑色だと分かる。背中には大きな鞄。そして、左手にバイオリンを持っていた。この人だ！と私が思ったのと同時にこの人も

「ああ、あんたか」

といった。

それがあんまりにも投げやりな「あんたか」だったので、ちょっとムッとして

「あんたって、何が？」

と言い返してやった。すると

「さっきの上手な歌を歌ってた奴だよ」とこの人は言った。

相変わらずぶっきらぼうな言い方だったが、上手だと言われて私は少しビックリした。

「そうだよ。ここで歌っていたのは私。歌、上手だった？」

そう聞いてみると、男は素直に頷き

「ああ、よかった。いい声だった」

といってくれたので私はこの人を許してやることにした。「ありがとう。嬉しい。さっきのバイオリンはあなただよね？すごく素敵だ

った」
私が笑ってそういうと急にこの人はそっぽを向いて
「ありがと」
と、つぶやくように言った。髪で分かりずらいが少し頬が赤くなっているように見えた。

もしかして照れてる？そう考えると急に可笑しくなって私は笑った。
「ねぇ。私は蛙っていうんだけど、あなたは何て言うの？」
「俺はキリギリスだ。よろしく」
そういうとキリギリスは手を差し出してきた。私はその手をじっと見た。ゴツゴツとしていて私の手とは全く違う。恐る恐る手を伸ばし、その手を掴む。思った通り固かったけれど、握ってみるととても温かくて優しい手だった。
「よろしく」
私がそういうと彼は嬉しそうに笑った。
それがキリギリスとの、出会いだった。

〜2章〜
それから、私たちは色んな話をしてお互いの事を知った。キリギリスが旅をしているらしかった。どこに行くの？と聞くと、「宛ての無い旅さ」と言うので「気障だね」と言ってやるとまた赤くなってそっぽを向いた。その仕種がとても可愛らしく、私はまた笑ってしまった。キリギリスは悪い奴ではなさそうだった。私も沢山話した。自分のこと、兄弟達のこと。キリギリスは旅をしているせいかとても物知りだった。ここ以外でも私の仲間を見たことがあるという。私や私の兄弟はこの池を出たことがなかったので、とても興味深かった。お互いの話が一段落したところで、私は彼にバイオリンを演奏してくれるよう頼んだ。もう一度聞いて見たかったのだ。
彼は二つ返事で「いいよ」というとバイオリンを構えた。肩の上に

乗せてほお擦りするように構える。私は初めてバイオリンを弾くところを間近で見た。演奏者は服も見た目も汚いのにバイオリン綺麗に光っていてちょっと面白いかった。一呼吸すると、彼は演奏をはじめた。

透明なバイオリンの音色が体をそっと包むように優しく流れる。先程よりもゆったりとして落ち着いた曲。私は目を閉じてメロディーに浸った。バイオリンの音色は少しだけ切なくて、とても美しい。初めて聞くはずなのに、なぜか懐かしいと感じてしまう。私はすっかりバイオリンに聞き惚れていた。とても穏やかな時間が流れていた。

そのあとも、何曲か彼にせがんで弾いてもらい気が付けば辺りを夕日がオレンジ色に染め上げていた。

「もう帰らないと」私が言うと

「そうか」と彼は言ってバイオリンを下ろした。

本当はもっと聞いていたかったけれど、帰らなければ兄弟達が心配する。

「ねぇ。あなたはいつまでここにいるの？」

バイオリンを入れ物に仕舞っているキリギリスに尋ねた。「分からないな。風の向くまま気の向くままさ」

肩を竦めて彼は答えた。

「本当に気障だねぇ」意地悪にそう言って笑ってやると彼はまた赤くなって顔を背ける。その様は可愛いかった。

「じゃあ、もう少しはここにいるよね？」

「まあ、もう少しは」まだ少し赤い顔で彼は答えた。

まだ少しはいるのか。私はその答えを聞いて、またバイオリンが聞けるかもしれないこと、そして彼にまた会えるかもしれないことを嬉しく思った。

私は彼とそのバイオリンのことをすっかり気に入ってしまっていた。

「そっか」わざとそっけなく言うと私は立ち上がって水の中に入って行った。
「またね」振り返り彼にそういうと、彼は笑って手を振ってくれた。ちょっと照れ臭くなりながら笑って彼に手を振り返すと私は水に飛び込んだ。泳ぎながら彼の視線がまだ私を追いかけているような気がした。

その日からあの場所に出かけて行くことが私の日課となった。私が行くとそこに必ず彼がいた。どうやらこの場所が気に入ったようで、私が行くと寝ていたり食事をしていたり時々バイオリンの作曲をしていたりした。最初こそまた来たのか、と言っていた彼も次第に私が来ることに慣れてしまったようで何も言わなくなった。
私は食事を作ったり、洗濯してやった。あまりに彼が面倒臭がりだから。彼は私が作った食事を美味しいと言ってくれた。それはよかったが、彼の服はどれだけ洗ってないのか汚れ放題で洗うのに苦労した。そんな待遇を彼は悪びれる風もなくまるで当然と言う顔で享受していた。文句を言っても我関せず、という感じだが「恋人みたいだね」と言うと顔を真っ赤にして照れるので時々仕返してやる。

それから彼に頼んでバイオリンを聴かせてもらう。時には私に一緒に歌うように言ったり、彼から作曲した曲を聞いてほしいと言うこともあった。彼の作る曲はいつも優しく美しい。だけど、どこか寂しい曲だった。
いつか、彼に聞いた。どうしてそんなメロディーを奏でられるのか。そうしたら彼は
「ただ、心の中にあるものをそのまま演奏しただけ」
と答えた。もしそうなら彼の心の中はどんな世界が広がっているんだろう。私には及びもつかない。

いつも彼は間の抜けたような、だらし無い恰好でダラダラしている。でもバイオリンを弾くと顔が変わる。その真剣な横顔を見る時、私はドキッとする。だらけた恰好をしているがよく見ると彼はとても整った顔をしている。痩せて細い顔も筋の通った鼻も一重の目も。本人が無頓着なので宝の持ち腐れだと思うが。

そんな彼と共に多くの時間を過ごしていくうち、私は彼に惹かれていった。彼に会えれば私はその日一日幸せだった。彼に会えない日は寂しくて仕方がなかった。気が付けば彼のことを考えていた。今何をしているだろう。そんなことですら気になった。私は彼に恋をしていた。彼のバイオリンが、彼の曲が、彼の仕種が、彼の笑顔が、彼が好きだ。気付いてしまえば止まることはなかった。彼への気持ちは大きく膨らんでいった。そして、それは心地好いものだった。彼を好きになって行く自分が嬉しかった。

でも、ある日私は知ってしまった。もうじきにこの関係も終わってしまうことを。

それは兄弟達と会話している時だった。ふと、キリギリスの名前を私は兄弟達に聞いてみた。すると、兄弟達の中で一番物知りが答えた。

「キリギリス」

彼等は一カ所に留まることなく旅をする種族。バイオリンを持ち、あちこちを回っている。バイオリンは自分の妻となるものを探す求愛の道具である、と兄弟が言ったときは少し驚いた。あれは、そのためのものだったのか。それをほぼ毎日自分は聞いているのだと考えると少し嬉しかった。だが、その先を聞いた瞬間その嬉しさも消えてしまった。

「彼等は一年しか生きられないんだ。冬眠することができないから冬を越せないんだよ」

言われたことが理解できなかった。その時私は一体どんな顔をしていただろう？兄弟の心配する声も聞こえなかった。

冬を越せない？生きられない？

池の周りでは八年の眠りから目覚めた蝉達が力強い声で賑やかに鳴きはじめていた。

それからも、私は変わることなく彼の元へ通いつづけた。いつものように振るまい、いつものように彼に接した。それは相変わらず楽しい日々だった。でも、心の奥であの言葉はしこりのように私の中から消えることはなかった。

〜生きられないんだ。〜冬を越せない。

私のに突き刺さったまま抜けない言葉。でも、私は彼にそれを問わなかった。ただいつも以上に笑って明るく振る舞った。彼との時間を壊したくなかったから。夏が過ぎていった。暑い夏になった。待ちに待った夏だったけれど、私が思い描いていた夏ではなかった。思い描いていた夏よりも、もっと楽しい毎日だった。彼と泳いだり水の掛け合いをしたり一緒に散歩をしたりして遊んだ。

ある日、彼は私にバイオリンを教えてくれた。初めて持つバイオリンは軽くて壊さないか心配になるほどだった。恐る恐るバイオリンに触れる私を見て彼は笑った。最初はひどい音しか出せなかったけれど、彼は丁寧に一から教えてくれた。彼の教え方は、上手でしばらくすると少しだけ私もバイオリンが弾けるようになった。初めてバイオリンを弾けたことに感動して、私は彼に抱き着いてしまった。抱き着いてから我にかえって恥ずかしくなったのだけど、彼も同じだけ喜んで私をギュッと抱きしめてくれた。すごく嬉しかった。

その後も何度か練習したけれど結局、私は彼にバイオリンを返した。彼は少し残念そうな顔をしていたけれど、やっぱり私は彼のバイオ

リンを聞く方が好きだったから。リクエストすると彼はいつものようにバイオリンを聞かせてくれた。暖かく優しいけれどどこか切なさを孕んでいて。そして聞く度に私を幸せにしてくれるメロディー。私は目を閉じながら耳を澄ませる。暑い夏のじっとりとしか空気。からりと照らす強い日差し。その日差しを避けて逃げ込んだ草の影を時折吹き抜ける心地好い風。彼のバイオリンを聞きながら、彼と共にいられる時間。その幸せに浸って何時までもこんな時間が続けばいいのにと何度も思った。

でも、そのたびに心の奥がチクリと痛む。あの言葉が私の妄想を打ち消す。

〜生きられないんだ〜

そんな夢はありはしないのだと。いづれ必ず終わる。バイオリンを演奏する彼の横顔を見る。彼はいつか居なくなってしまう。彼のバイオリンを聞くことも、話すことも彼が私に笑いかけてくれることも失くなってしまうのだ。そう思うと、いいようのない感情がうちから溢れてきて。頬を涙が流れた。慌てて顔を背ける。彼に気づかれないように。その度に私は

でも、まだ。まだ冬は先だから。まだ。

と、そんな言葉で私は自分の心を騙していた。欺瞞だと分かってる。それでも。

あなたの笑顔を見る度に泣いてしまいそうになるから。

だから、私は笑いつづけた。笑って今この時間を大事にしたかった。

出会い（後書き）

「蟻とキリギリス」のパロディを作るつもりだったのに、

蛙と蟲斯

いつもの場所に行くと、いつものように彼がいた。私の顔を見ると嬉しそうな顔をして手を振ってくる。私も笑顔で、振り返した。

「今日はちょっと遅かったな」
彼は何気ない感じでそう言った。だが、私は言葉に体が固まってしまう。
「えと、ちょっと寝坊しちゃってさ」
慌てて取り繕う私を
「なんだ、それ」
と彼は笑った。私も合わせるように笑う。
本当は違う。兄弟達と食べ物を探していたのだ。冬籠もりに備えて。
別にやましいことじゃない。でも、なぜだか彼には言えなかった。
言いたくなかった。

しばらくは、いつもどおり彼と話したり彼の身の周りの世話をしたりして過ごした。最近では、彼はほとんど自分の身の周りのことを私に頼るようになっていた。めんどくさがり、と私はその度に彼を叱る。でも、彼はどこ吹く風。
そんな代わり映えのしない、でも幸せだと思える時間。

こんな時間が何時までも続くことはない。

暗い考えが脳裏に掠める。その度に振り払う。今は考えないって、笑うって決めたんだから。
知らず下を向いていた自分を鼓舞するように、ぐっと顔をあげた私の鼻に小さな冷たい衝撃。

「あ、雨」

小さな雫はじきに数を増やして、シトシトと降る秋雨となった。
彼は荷物を手早くまとめ雨に濡れない岩の窪みに慌てて走って行った。
私も雨は好きだけど、秋の雨は少し冷たすぎて体が冷えてしまう。
だから、彼について行った。

岩の窪みから彼と一緒に外を見ていた。雨は静かに辺りを包み込んで、ただ降り続く。近くの石に腰掛けてボンヤリと雨を眺める。彼は隣で少し濡れた荷物を拭いている。静かな時間だった。でも、決して居心地の悪いものでは無かった。彼が荷物を拭く音が続いている。私はボンヤリとその音を聞いていた。

不意に、彼が私に言った。
「最近、元気が無いな」
急に言われたので、咄嗟に反応出来ず少しの間、固まってしまった。
「そ、そうかな？別に何も無いけど？」
慌ててそう返したが、彼は何も言わずに私を見つめていた。
「何か悩み事？」
そう問われて、言葉に詰まる。心に小さな痛みが生まれた。その痛みを隠しながら、私は落ち着いてもう一度
「何も無いよ。大丈夫」
と笑った。彼は私を見つめていたが、
「そうか。なら、いいけど」
と言って微笑んだ。
心は少なからず動揺していたが、彼には気づかれたくない。もっとしっかりしなければ。一度深呼吸をする。心の揺れは、だいぶ治まった。

彼は荷物をあらかた拭き終わると相棒のバイオリンを取り出して、ゆっくりと弾きはじめた。
雨によく合っている、落ち着いた静かなメロディーが辺りに響く。
私も目を閉じて、ゆったりとそのメロディーに身を委ねた。
ここには、私たちだけしか居なかった。世界で2人だけになってしまったみたい。それでもいいかもしれない。このまま、何も変わらなければいいのに。いつまで、ずっと…。

不意に彼が演奏を止めた。驚いて見ると、不安そうな顔をして彼は私を見ていた。
「最近、元気がないけど何かあったのか？」
一瞬、息が詰まる。彼は真っすぐに私を見つめていた。
このまま、胸の中の想いを何もかも話してしまおうか。そうすれば楽になれるかもしれない。そんなことが頭を過ぎる。でも。

「何もないよ？ちょっと最近忙しくて疲れてるのかも」私は何でもないように彼に笑いかけた。まだ彼は不安そうな顔をしていたが、しばらくして元の優しい顔に戻った。
「そっか。忙しいって、あれか？冬眠の準備ってやつ？」
一瞬ギクッとしてしまう。
「そ、そうなんだ。寝床の準備とか食料を集めてたくさん食べないとダメだから忙しくて」
「そういえば、最近ちょっと太ったよな」
もうっ、とむくれる私を彼は面白そうに笑った。
「そうだ！あなたも一緒に冬眠しよう？暖かいところでゆっくり眠るの。気持ちいいよ？」
おどけて言う私に、しかし彼は考え込むような顔をして
「でも、なんだか怖くないか？そのまま起きられなくなりそうで」
と、言った。

そんなことは、ないよ。ちゃんと起きられるよ。むしろ、冬が来て起きられなくなるのは…

それ以上、考えたくなかった。彼がそばにいるここでこんなこと考えたくない。

急に泣きそうになった。辛くて苦しくて泣きたくて、泣き出せたら少しでも楽になるんだろうけれど彼がそばにいるのに泣けない。泣いてはいけない。でも、彼の顔を見たらもう駄目だった。

「ごめん！帰るね」

そう言い捨てて、私は雨の中に走り出した。彼が何かを叫んでいた気がするが聞こえない。彼も驚いているだろう。こんなの駄目なのに。もっとしっかりしないといけないのに。

冷たい雨の雫が降り注ぐ中を走る。私の全身をぐっしょりと濡らしていく。でも、目元だけは熱い滴で濡れていた。

それから、私は彼の元へ行かなくなった。

タイムリミット（前書き）

明けましておめでとうございます。今年もよろしくお願いします。
やっと続きが降りてきたので、書いてみます。まだまだ習作の域を
出ない作品ですがどうかお付き合い下さい。

タイムリミット

私が彼のもとに行かなくなって、何日もの時間が流れた。私は兄弟達と食べ物を探し、冬眠のための寝床作りに集中していた。そうして他のことに集中していれば彼のことは考えなかったから。このまま彼のことを忘れてしまえそうな気もしていた。

でも兄弟達からボンヤリしていることが多くなったと言われるようになった。

雨が降る度に、風が強く吹く度に朝目覚める時、夜眠ようとする時

「彼はどうしているのかな？」

と思ってしまうのだ。そして、決まって思い出すのは美しいけれどどこか哀しい彼のバイオリンの音色。出来るならばもう一度、聞きたかった。もう一度彼に会いたかった。でも私は彼に会うのが、とても怖かった。

彼に会いたい。

でも、会うのが怖い…

彼を好きになる前にはこんなこと、考えなかった。何も考えず素直に彼の元へと、走って行けた。

でも、今ではどうしたらいいのか分からない。

けれど、どんなに悩んでいても

時間は待ってくれない。一日一日確実に流れていった。

確実に冬は近付いていた。

そして、彼に会わなくなって１４日目の朝

兄弟達が私を呼ぶ声で目が覚めた。部屋の中は冷たい空気が充満していた。日よけからまばゆい程の光りが差し込んでいる。眩しさに思わず目を閉じて布団を被り直した。
いつもより時間が早い気がする。もう少しだけ眠りたい。ウトウト二度寝しかけていると兄弟達が騒いでいる声が部屋の外から聞こえてきた。バタバタと走る音。
ぼんやりと布団の中で何だろうと思っていた私は、

「見て！初雪だ！！」

この声に飛び起きた。
部屋を飛び出し玄関に溜まっていた兄弟達を押しのけ外を見た。

あたり一面に空から白く冷たい花が降っていた。

冬だった。

まだ、積もるほどでもない。すぐに止みそうな小さな小さな粉雪。
だけど、私がそのまま家を兄弟達の制止を振り切り飛び出すのには充分な雪だった。

まだ大丈夫なの？あとどれぐらい時間が残されているの？何も分からない。
分かっているのは雪によって知らされた彼との別れが近いことだけ。
川はすでに凍りついていた。そのことが私の不安を更に加速させる。

溶けるまで泳ぐことは出来ない。私は息を切らして、走りつづけた。
彼が心配だった。
彼の声が聞きたかった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2306z/

蛙と蟲斯

2012年1月1日21時48分発行